

私の
子ども



生い立ちの記

時代 (1)

牛島 義友

私は明治三十九年に長崎に生まれた。父親は聖三一教会という聖公会の牧師で、住所は大村町八番地で、隣は大神宮の神社があり、左隣は一軒おいて裁判所の建物があつた。

ここはよい遊び場であり、前の道路は相当広かつたと思う。後年この場所を地図を頼りに探したが見付からず、結局県庁の前の広い通りに吸収されていった。教会はかなり大きな建物で広い事務室がついており、その隣に二階建ての



牧師館があり、庭に大きな無花果があった。二歳上の姉の思い出の記によると、その木に登って好きな讃美歌をよく歌っていたらしい。

私の実の兄妹は四人であるが、再婚相手の両親がそれぞれ連れ子があり、かなり複雑な家庭で母親を苦しめていた。後年になって私が家族関係の心理の中で義理の親子の関係を上げた時に、先般なくなられた教育大学の桂先生は義理の親子関係を深い洞察をしているとほめてくれたが、このような我が家の体験があったからである。

父は厳格でよく叱られ、二階に上る階段の下の押入れに入れられた。一度だけ温泉に連れて行かれた事が楽しい思い出となっている。

長崎にはもう一つイギリスの婦人伝道師達が講義所を開かれていた。そのイギリスから来られたコックス先生は私が生まれた頃であったのでよく可愛がってくれ、私が盲腸で病臥した時はイギリス製の玩具を頂いたりした。この方はじめ当時のイギリス人には自給伝道師としてオックスフォードなど出身でしかもミッションには属するが無給で働く方が多かった。あとで福岡に移った時にも、ニュージールランドから夫婦で来日し、幼稚園を開きながら、伝道を助けていた方もあった。その他熊本で癩病の人のための回春病院を独力でつくれたリデル女史もこのような方で、この態度はその時の私の人間形成にも強い



影響を与えた。いわゆる貴族の義務としての奉仕の精神である。

小学二年の時、父の台湾伝道のため台北に移った。そこでは父から厳しい宗教教育をしつけられ、土曜日には教会の掃除の手伝い、又説教会のある時にはピラ配りをさせられ、非常にいやであった。又北白川宮をまつる台湾神社があり、全校生徒が遠路を歩いてお参りしたが、父はそれを嫌い、学校に行つて、「父が行つてはいかんと言いますので」とことわり、先生からいやな顔をされた。

連合運動会も日曜であるので父は参加を許さず、母が午後だけならよいと言つて、午後だけ見学していた。しかし当時はまだのちの戦時中のような迫害は受けなかった。

数年後、教会が町の中に新築されたが、ある日曜日子供達で遊んでいて私があやまって教会の塔のガラスに石をぶつけてこわした事があった。すぐ父にあやまりに行ったが、礼拝前で信者が集まってきたので、さすがの父もいつものようにどなりつけず、叱られずにすんだ。

台北では賀来君の家によく遊びに行ったが、これは専売公社の社長で親任官で、三本筋の高官の子弟であった。当時普通の教師は判任官で帽子に金モール一本で、校長は二本筋、高等官は三本すじで、長剣を吊した人は、二、三人位



しかなかった。邸も豪壮で、広い応接間が三つもあった。毎日遊びに行っていたが、いつとはなしに行かなくなり、又親御さんは子弟の教育のため学習院に転校させた。

後年私が東大の文学部二年生になった時、彼は法学部に入學され、お会いしたが、交際は別に復活しなかった。

四年後門司に移った。ここは生活水準は低く、中学への受験勉強をするのは二人しかおらず、私は毎晩先生の宿でお世話になった。小倉中学に合格、新生活に入ったが、苦手の作文を毛筆で書かされるのが何より辛かった。又体操の時間に、自分の体が健全だと思ふ者は手を上げると言われ、素直に手を上げた所、裸にされ、背筋が曲がっている、こういう体は一番いけないと皆の前で恥をかかされ、口惜しい思いをした事がある。

(元・お茶の水女子大学教授)